

高校生の時、スーパーでレジのアルバイトをしていました。その頃は今の様なバーコードで読み取るものとは違い入力は古いタイプ式のものでおつりの表示も出ません。それでも慣れてくるとおつりを間違えることは、ほとんどないのですが、注意が散漫になるとミスをおかしてしまうことがあります。

ある時、閉店間近の店内に濡れたカッパを着た客が私のレジの前に立ちました。50代くらいの男性の方です。停止板を出して「レジ上げ」をしていたので他のレジに案内しようとしたところ、「五百円、多くもらったから返しに来た」とおっしゃるのです。

家に着いて気付き、雨の中をバイクで30分の道のりを急いで届けて下さったようです。しっかり握りしめた五百円札は少し濡れていました。精算してみないと分からないので、その旨を伝えいったんおひき取りを願おうと、連絡先をお聞きするとそれにはこたえず、「娘があんたと同じくらいで社会人になったばかりなんだ」と言い、「お金が合わなかったら大変だっぺと思ってヨ」と朴訥に言葉が続きました。

事務所にもどり、精算してみると案の上五百円足りません。

おつりが足りないとお叱りを受けたことは何度かありますが、返しに来られたのはその方、おひとりだけです。

当時私は悩みごとも多く親に対しても反抗的で常にふてくされた態度で人にも不快感を与えていたと思います。その方との一期一会は私の中にくすぶるモヤのようなものを払しょくしてくれたと、今でも思っています。あの、五百円札の感触を忘れることはありません。